

# 南の風 354

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

アンダーカテゴリー女子代表の課題の続きです。萩原氏の話を中心に進めます。

課題については、もちろん教える責任は私にあるのですが、ここにお集りの各カテゴリーの指導者の皆様にも共有していただき、日頃の指導に生かしていただければと思います。

## 課題2：ハーフコートオフENSE

- ★①オフボールマンの合わせがよく分かっていない。『ボールも人も動くオフENSE』は Good であるが動き過ぎる、あるいはやみくもに動くのは Bad。中には、待っているのが悪だと思っている選手が多い。「何で動いたの」と聞いた時、再現ができない。ドライブだけで崩すのは難しいので、周りが目的を持って動いて合わせること、ボールマンが何をしようとしているのかを察知することが必要である。
- ★②、①に付随してスペース特にコーナーを有効に使うことができない。また、だんだんボールから遠ざかってしまうことが多々ある。パスの距離は通常5～7mだが広がりすぎる傾向が強い。
- ★③約束事（ハーフコートの中での動きのルール）を理解して、遂行することが得意ではない選手が多い。再現性（練習でやったことが5on5やゲームでやろうとしない）が弱い。基本的な合わせ方（スペーシング）を身につけることが大事。
- ★④スクリーンプレーに慣れていない。代表に参加している選手の中にも、スクリーンオフENSEを経験したことがない子がいる。海外での試合の時に、ピック&ロールの動きができなかったり、相手のスイッチに対して気づかずにミスマッチを利用できなかったりする。また、スクリーンのオフENSEができないということは、スクリーンのディフェンスもできないことにもつながっている。国際試合では、ほとんどピック&ロールの連続である。スクリーンプレーは合理的なプレーなので、日本のジュニアカテゴリーでももっと精度を上げていきたい。
- ★⑤よいシュートセレクションが取れない。日本代表はドライブが他国に比べて速いという利点があるが、ドライブからの崩しだけでは効果的な攻めにつなげるのは難しい。

課題1で触れたように、サイズの大きい海外の選手に『間合いを取ったディフェンス』をされると、崩すことや味方との合わせができなくなり、シュートを打たされてしまうことになる。またそれを解消するために、日本のジュニア育成年代の定番としてドリブルハンドオフで攻めようとするが、ボールのところだけの合わせになってしまうケースが多い。やはり★④のようにピック&ロールからディフェンスを崩し、それに関わらないオフボールマンとの合わせ（スペーシング）で攻めることが不可欠なものになる。そこで今世界で主流となっている、ピックプレーを取り入れる必要がある。なぜ世界で頻繁におこなわれているかと言えば、やることによってギャップが生まれチャンスが広がるからである。ならば日本もピック&ロールを積極的に取り入れ日本流にアレンジしていけばいいと思う。元々日本は新しいことをまねて、それを緻密にやっていくことに長けているのである。（以上萩原氏） 次号にします。